崩壊寸前 !! 沖縄県の救急医療

～全国で唯一、休日・夜間診療所が存在しない沖縄県～

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター　星野　耕大

沖縄県の救急医療体制が大きく歪んでいる現状をご存じでしょうか？

わが国の救急医療体制は、「一次」「二次」「三次」の三段階に分類されており、段階的に適切な医療機関に患者を振り分けることで、医療資源の最適化と患者の安全性を担保しています。軽症患者は一次救急として休日・夜間診療所などで対応、入院が必要な中等症は二次救急、集中治療や緊急手術を要する重症例は三次救急として救命救急センターが担うのが本来の姿です。

ところが沖縄県では、この一次救急を担う「休日・夜間診療所」が一つも存在しない、全国で唯一の都道府県です。その結果、本来三次救急患者に対応すべき救命救急センターに、発熱などの軽症患者が夜間・休日に集中しています。特に小児患者においてはその傾向が顕著であり、一次救急の受け皿が無い現状では、やむを得ず救命救急センターや大病院を受診せざるを得ないのが実情です。

沖縄県立南部医療センター・こども医療センターは、重症外傷、脳卒中、心筋梗塞、小児の重症疾患といった南部医療圏の三次救急患者に対応する救命救急センターの役割を担っています。しかし現実には、一次救急レベルの軽症患者が時間外に殺到し、本来の三次救急機能が著しく圧迫されています。このような状況は、単なる混雑や職員負担の問題にとどまりません。現在の診療報酬制度では、一次から三次を幅広く受け入れる ER 型救急医療は極めて評価されにくく、「診療所で対応すべき軽症患者を不適切に受け入れている」とみなされます。実際、当院の救命救急センターが一次救急を多く受け入れてしまうことで、「あるべき医療機能を担っていない」と評価されて病院機能評価のランクダウン、更には収益にまで悪影響を及ぼしています。

こうした構造的問題の背景には、米軍統治下で育まれた「どんな症状でも病院 ER で診てもらえる」という沖縄独自の医療文化も存在します。しかし、この ER 文化は、全国統一の診療報酬体制とは相容れず、いまや制度的な限界に直面しています。このままでは、地域の救命救急センターが本来の役割を果たせなくなり、最終的には「救える命すら救えない」事態に陥る危険性があります。加えて、県内の多くの病院において一次救急の外来受診制限が始まっています。夜間・休日に軽症患者を受け入れる医療機関が、県内から姿を消す日も近いと思います。

この沖縄県における救急医療の歪みは、もはや個別の医療機関の努力だけでは解決できません。医療機能の分化と役割分担の再構築、住民への適正受診の啓発、そして何よりも、一次救急を担う体制（休日・夜間診療所やオンライン診療など）の整備が求められます。沖縄は、かつて全国に先駆けて ER 型救急を導入した先進的な地域でした。その誇るべき歴史と精神を尊重しつつ、制度と調和した持続可能な救急医療体制の再構築が、いま求められています。

本稿が、沖縄の救急医療のあるべき姿を再考する一助となれば幸いです。